

博士論文（要約）

論文題目 近代中国におけるプロテスタント医療宣教の展開
——中国医療伝道協会を中心に(1886-1932)

氏 名 曹貞恩

目次

| | |
|-------------------------|----|
| 序論 | 1 |
| 一 研究史の整理と課題の設定 | |
| 二 主な史料と本論の構成 | |
| 第一章 医療と伝道の間 | 17 |
| はじめに | |
| 一 医療伝道とは何か。 | |
| (1) 医療宣教師とは何か | |
| (2) 医療伝道の重要性 | |
| (3) 医療が先か、伝道が先か | |
| 二 医療や教育活動における伝道 | |
| (1) 病院での伝道 | |
| (2) 医学校での宗教教育 | |
| 三 理想と現実 | |
| 四 医療宣教師から中国人へ | |
| 小結 | |
| 第二章 中国医療伝道協会から中華医学会へ | 57 |
| はじめに | |
| 一 中国医療伝道協会の誕生 | |
| (1) 設立 | |
| (2) 運営 | |
| (3) 中国医療伝道協会と中国人 | |
| 二 中国医療伝道協会から博医会へ | |
| (1) 雑誌名の変更をめぐる議論(1907年) | |
| (2) 協会名や会則の変更(1925年) | |
| 三 中華医学会との協力 | |
| (1) 中華医学会の誕生 | |
| (2) 姉妹協会としての協力関係 | |
| (3) 新しい中華医学会の誕生 | |
| 四 合併の要因 | |
| (1) 教会医療伝道事業の土着化 | |
| (2) 医学界内部の要因 | |
| 小結 | |

| | |
|---------------------------|-----|
| 第三章 医療と教育活動からみた土着化 | 99 |
| はじめに | |
| 一 ミッション系病院の経済的な自立を求めて | |
| (1) ミッション系病院の状況 | |
| (2) 有料治療をめぐる論争 | |
| (3) 経済的な自立の実態 | |
| 二 医学教育をめぐる議論 | |
| (1) 医学生教育の目的と医学校の運営 | |
| (2) 英語か中国語か | |
| 小結 | |
| 第四章 医学用語翻訳活動 | 137 |
| はじめに | |
| 一 医学用語委員会 | |
| (1) 設立 | |
| (2) 翻訳の特徴と限界—骨名を中心に | |
| 二 中国人との協力 | |
| (1) 医学用語談話会 | |
| (2) 医学用語審査会 | |
| 三 医療宣教師の用語翻訳活動に対する評価 | |
| 小結 | |
| 第五章 医療宣教師と中国伝統医学—中薬研究を中心に | 163 |
| はじめに | |
| 一 医療宣教師の中薬研究 | |
| (1) 中薬への興味 | |
| (2) 中薬学委員会の設立と活動 | |
| (3) 中薬の科学的研究 | |
| 二 中薬研究の目的 | |
| 三 医療宣教師の中国伝統医学に対する認識 | |
| (1) 否定と肯定の共存 | |
| (2) 中薬に対する認識 | |
| (3) 中国人の影響 | |
| 小結 | |
| 結論 | 201 |
| 一 中国医療伝道協会と医療伝道の土着化 | |
| 二 土着化に対する医療宣教師の懸念 | |
| 三 教会医事委員会の活動 | |
| 四 韓国における教会医療伝道事業の土着化 | |
| 五 医療伝道への評価 | |
| 文献一覧 | 215 |

図表目次

| | | |
|-------|------------------------------|---------|
| 図 1 | 病院の規模別中国人クリスチャン医師・看護婦の割合 | 32 |
| 図 2 | 患者を改宗させるための様々な方法の効果比率 | 44 |
| 表 1 | 医学校における外国人職員の給料 1914 年 | 19 |
| 表 2 | 回答からみる医療伝道活動における個別の事業の重要性の順位 | 41 |
| 表 3 | 歴代の中国医療伝道協会会長 | 59-61 |
| 表 4 | 1927 年ミッション系病院の状況 | 80 |
| 表 5 | 1927 年ミッション系医学校の状況 | 80 |
| 表 6 | 医療伝道統計 | 101 |
| 表 7 | 済南府病院の収入及び支出内訳 | 106 |
| 表 8 | ミッション系病院の収入 | 107 |
| 表 9 | 中国各医学校の学生数 | 110-111 |
| 表 10 | ミッション系医科大学 1914 年 | 114 |
| 表 11 | ミッション系医科大学 1930 年 | 115-116 |
| 表 12 | 新漢字の消滅 | 145 |
| 表 13 | 鉱物性薬材の価格比較 | 171 |
| 写真 1 | 台南病院の礼拝堂 | 28 |
| 写真 2 | 奉天病院の職員と回復期患者 | 31 |
| 写真 3 | 第一次中国医療伝道協会大会 | 64 |
| 写真 4 | 雑誌表紙の変化 | 68 |
| 写真 5 | 中国における医療活動 | 72 |
| 写真 6 | 合併後の第一次大会 | 77 |
| 写真 7 | 博医会の印章 | 82 |
| 写真 8 | 聖約翰書院の解剖学授業 | 112 |
| 写真 9 | 『医学辞彙』の表紙 | 141 |
| 写真 10 | 医療用アルコール製造法の一部 | 168 |
| 写真 11 | 中国の商店街 | 173 |
| 写真 12 | ヒュームと交流していた中医 | 179 |
| 写真 13 | 『申報』の薬広告 | 187 |

論文の本文

本論文は五年以内に出版予定であるため、規定にもとづき、以下では各章の要約のみを示すことで、全文の公表に代える。

なお、いくつかの章の内容については、すでに以下のように雑誌論文として発表済み、または発表予定なので、そちらを参照してほしい。

第1章

「中国医療伝道協会から中華医学会へ」(『東洋学報』35(4)、2014) 1-6頁。

「의사인가, 선교사인가——医療宣教師의 정체성 문제와 역할의 변화」(『中国近現代史研究』62、2014)。

「医療宣教師란 무엇인가」(『明清史研究』2015年投稿予定)

第2章

「中国医療伝道協会の 역할——초기 활동을 중심으로(1886~1907)」(『明清史研究』37、2012)197-207頁。

「中国医療伝道協会から中華医学会へ」(『東洋学報』35(4)、2014) 6-27頁。

第3章

「中国医療伝道協会の 역할——초기 활동을 중심으로(1886~1907)」(『明清史研究』37、2012)207-224頁。

「프로테스탄트 医療宣敎의 도착화(1886-1932)」(『중국사연구』2016年投稿予定)

第4章

「中国医療伝道協会の 역할——초기 활동을 중심으로(1886~1907)」(『明清史研究』37、2012)224-233頁。

第5章

「19세기 중국에서 활동한 医療宣教師는 왜 中藥을 연구하였을까」(『韓國医史学会誌』27(1)、2014)。

「医療宣教師와 중국 전통의학」(『医史学』2015年投稿予定)

序論

まず本論文で主な研究対象になる医療宣教師という特殊な集団について説明しておきたい。本論文でいう医療宣教師とは、プロテスタント宣教団体から非キリスト教世界への医療伝道を目的として派遣された医師——その一部は聖職者でもあった——を指す。19世紀に入ってから、プロテスタント教会は医療伝道の必要性を強く感じ、医療宣教師という肩書きで医師を非キリスト教世界へ派遣した。とくに本論文は、全中国で活動していた医療宣教師の団体である中国医療伝道協会(The China Medical Missionary Association、略称: C. M. M. A.) に注目し、この団体が設立された1886年から中華医学会と合併した1932年の間におけるプロテスタント教会の医療伝道事業の土着化過程を探る。

本論文でいう「教会医療伝道事業の土着化」とは、ミッション系病院及び医学校における運営・管理権が、外国人医療宣教師から中国人に移転されることを意味する。このような土着化は、医療宣教師が中国に渡った時点からすでに始まっていたともいえよう。しかし、医療宣教師の指揮下に置かれていた中国人医師や伝道者にミッション系の病院や医学校の指導権を与えるべきだという主張が強まったのは、20世紀に入ってからであり、それが広く実現されていくのは1920年代以降のことである。

医療伝道事業の土着化に関する研究は、中国におけるキリスト教の土着化問題を考察するためにも必要な作業であるのみならず、西洋医学が中国に輸入されて、中国人・中国社会にとり入れられていく過程を明らかにするための第一歩であるとも言えよう。また、このような土着化の背景には、医療宣教師内部における変化、キリスト教会内部の変化、中国政治や社会の変化、医学界の変化など複雑な要因が絡んでいたため、その過程を考察することは近代中国の社会や医療界を理解するためにも必要な作業である。

本研究では、中国医療伝道協会が1887年に創刊した医学雑誌 *The China Medical Missionary Journal* を主に利用する。この雑誌は医療伝道事業の報告、中国伝統医学の紹介など豊富な情報を含む史料であるが、従来の教会医療事業に関する先行研究ではあまり利用されていない。なお、1907年に *The China Medical Journal* と雑誌名が変更されたので、以下1887年から1907年の6月号までは *CMMJ*、1907年7月号から1931年までは *CMJ* と略す。そのほか、キリスト教関係雑誌や中国側の史料も積極的に利用した。

第一章 医療と伝道の間

一 医療伝道とは何か

医療宣教師とは、専門的医師である牧師あるいは平信徒として、宣教団体と雇用関係を結んで非キリスト教国家に派遣される者を意味し、初歩的な治療行為を行う宣教師のことではない。パーカーが最初のプロテスタント医療宣教師として中国に渡ったときには、医療宣教師の資格や役割が広く理解されておらず、医療宣教師の必要性について疑う人も少なくなかった。一部の保守的な人は、聖職者による布教こそ唯一の適切な伝道方式であり、医療活動のような慈善事業は、貴重な人材や資金を分散させるに過ぎないと主張した。しかし 19 世紀末の中頃から 20 世紀初期にイギリスやアメリカで起きた社会福音運動の影響によって、教会の活動は個人の救済から社会の救済を強調する方向に進み、医療活動のような慈善事業が教会の重要な活動とみなされるようになった。

医療伝道の必要性が最も明快に表現されているのは、クリスティー(Dugald Christie)の 1907 年大会における報告である。彼は、「医療伝道がキリスト教会の伝道の不可欠なる永久的部分として認められる以上、教会はかかる事業の創設のみならずその継続のためにも全力を尽くすべきである」と、医療伝道活動に対する教会の全面的な支援を要求した。こうしたクリスティーの決議案は大会で可決され、医療伝道は福音伝道という目的が達成されればすぐに片付けられるような手段ではなく、布教の本質的な部分であるとみなされた。

一方で医療宣教師の間では、医療を重視すべきか伝道を重視すべきかをめぐる様々な議論が行われたが、結局 1907 年大会において、医療宣教師は医師であると同時に福音伝道者としての役割も果たすことが決められたのである。

二 医療や教育活動における伝道

当初ミッション系病院では、患者に宗教活動への参加を強制していた。しかし 20 世紀以降、ミッション系病院の重点は伝道活動から医療や衛生活動へと変化し、宗教活動への参加を拒否する患者の場合には、それを強制しないように伝道活動における方針も変わっていく。そのため、病院の職員がすべてクリスチャンであることが最も重要視された。1932 年レノックスの調査によれば、ミッション系病院で働いている中国人医師や看護師の多く

がクリスチャンであったことがわかる。

当初、医療宣教師が医学生を教育した目的は、ミッション系病院で働く助手の養成にあった。また、伝道を成功させるために、助手は真面目なクリスチャンであることが要求された。そのため、医学生がクリスチャンであることは大変重要であった。

しかし 1920 年代からは、反キリスト教運動や教育回収運動の影響によって、ミッション系大学における宗教教育に対する批判の声が高まった。1924 年から 1936 年にわたって、教会関係学校におけるクリスチャン学生の比率は大きく減少する傾向がみえる。同様にミッション系学校の宗教性は希薄化しつつあり、医学校も同様であったと思われる。

三 理想と現実

医療宣教師にとって、医療と伝道はどちらも重要であったが、医療宣教師の数が牧師や宣教師に比べて極めて少なかったため、医療活動に追われ、実際には伝道にほとんど時間を割けない場合が多かった。医療と伝道の両立が現実的に不可能であると考えた医療宣教師らは、伝道事業において同僚聖職者との協力を求めることを勧めた。20 世紀に入ってからミッション系病院での医療と伝道は益々分離され、具体的な伝道業務はもっぱら伝道を専門とする牧師や福音伝道者が担当し、医療宣教師は単にそれに参加するだけになっていった。

また、このような変化は 1920 年前後に加速されたが、その理由としては、まず教会のような専門的伝道機関が中国に次々と建設されるなかで、病院の伝道機関としての必要性はもうなくなっているのではないかという疑問が出されたことが挙げられる。次に挙げられるのは、キリスト教とは関係のない病院が増加しているなかで、ミッション系病院が競争力を備えるためには、病院の科学化・専門化が必要であるという主張が強まったことである。

四 医療宣教師から中国人へ

医療宣教師が医療活動に集中していく過程のなかで、より効果的な伝道のためには、病院での伝道活動を中国人に委任する必要があるという主張が強まった。医療宣教師がいう中国人とは、必ずしも病院に属している者だけではなく、外部の中国教会の関係者も含まれた。病院での福音伝道を中国人に任せるようになった最も大きな理由は、それがより効

果的であると判断されたためである。

1920年代に入ってから、ミッション系病院における伝道活動の主体は、医療宣教師から中国人福音伝道者に移りつつあった。このような変化は、医療伝道事業の土着化、つまり医療宣教師の仕事が中国人に移転されていく流れの一つであるといえよう。

第二章 中国医療伝道協会から中華医学会へ

一 中国医療伝道協会の誕生

1886年、プロテスタント医療宣教団体の連合組織である中国医療伝道協会が創立された。翌年には、中国最初の医学専門雑誌である *The China Medical Missionary Journal* が上海で創刊された。この雑誌はアジア各地で活動している医療宣教師の間での意見交流の場として機能した。

医学用語の翻訳作業など、協会の重要な業務は委員会によって行われた。1890年には六つの委員会が設立されたが、そのなかで実際に活動したのは医学用語委員会(Committee on Medical Terminology)と中薬委員会(Committee on Chinese Materia Medica)のみである。そのほか、1905年には出版委員会(Publication Committee)、1907年には調査委員会(Research Committee)、1915年には教育委員会(Council on Medical Education)や公衆衛生委員会(Council on Public Health)が次々と設立され、中国の医療における様々な事業を担当した。また中国医療伝道協会の会員は、それぞれ各地域に設けられた支会に所属した。各支会に属する会員は、2年ごとの中国医療伝道協会大会(Conference of the China Medical Missionary Association)において一同に会した。

会員としては正会員(Active Members)、名誉会員(Honorary Members)、通信会員(Corresponding Members)があった。正会員になることができるのは、中国で医療伝道に従事している者だけであった。宣教団体に所属しない者は名誉会員として、中国外で活動する医療宣教師は通信会員として加入した。当初中国医療伝道協会内部においては、中国人の参加はほとんどなかった。それは会員資格において、国籍は問われなかったものの、公認された正規の医科大学の卒業生であることが要求されたためである。

中国人会員が、協会の中で実質的な発言力を持つようになったのは、1920年代以降だと思われる。とくに1925年会員規約を変更し、医療宣教師ではない医師も正会員として加入できるようにしたため、博医会内部での中国人医師の影響力は強くなっていった。

ところで中国政府は中国医療伝道協会の活動初期には、中国医療伝道協会と直接的な関係を持たなかった。しかし中国人西医の増加に従い、伍連徳のように中国政府の行政官でありながら、博医会の会員として活動する人物が現れた。このような人物を通して、博医会は中国政府との接触を試みた。

二 中国医療伝道協会から博医会へ

1907年の第三次中国医療伝道協会大会では、協会の中国語名称とともに、雑誌の名称に関する議論が進められた。編集者の一人であるジェフリーズ(W. H. Jefferys)は雑誌名から *Missionary* という単語を削除し、*China Medical Journal* に変更することを提案した。当時協会の会長を務めていたクリスティーは、雑誌名を *China Medical Journal* に変更するという決定を公布したが、これは宣教師による医学雑誌という性格自体の変化を意味するわけではないことを強調した。一方、協会と雑誌の中国語名称に関しては多くの意見があったが、結局「博医会」と『博医会報』という名称が採択された。

1923年会長であったジョンソンは、C. M. M. A から M(Missionary)をひとつ取り消すことによって、本協会が中国のすべての医師を代表する団体として認められるであろうと断言した。大会ではまた、医療宣教師ではない医師にも正会員になる資格を与えるべきだとの提案がなされ、これに即して会員規約が変更されることになった。翌年、協会名および会員規約の変更を骨子とする会則の草案が提示され、それに基づいて1925年には新たな会則が公表された。協会の名称は、博医会(The China Medical Association)に変更された。また、協会内に医療伝道部(Medical Missionary Division)を新設し、伝道関係の事業はこの部署が担当するようにした。

博医会は、宗教色をなるべく出さず、純粋な医学団体としての性格を強調することによって、キリスト教信徒ではない医師も会員として受け入れ、協会の活動を維持・拡大しようと試みたのである。

三 中華医学会との協力

1915年2月5日の博医会大会に参加した中国人西医21人は、中国人を中心とする学会の設立について議論し、その日の夜に会議を開き、「中華医学会(The National Medical Association of China)」の設立を正式に宣布した。「中華医学会宣言書」によると、学会の目的として最初にあげられているのは、医師同士の親交を活発にすることである。また、医徳〔医師としての道徳性〕や医権〔医師としての権利〕の維持、医学や衛生観念の普及、中国と西洋医学界の連絡などが目的としてあげられた。また、1915年には『中華医学雑誌(*The National Medical Journal of China*)』が創刊され、中国語版と英語版が同時に出版された。中華医学会

は、中国人だけが正会員や準会員になる資格を与えられたことや、英文での名称に **National**、中文で中華という単語が入っていることから、中国人による、中国全体を代表する学会を目指していたことがわかる。

博医会と中華医学会は、1917年1月24日から31日まで合同大会を開催した。また1920年2月21日から28日まで開催された博医会大会では、23日から26日の夜に中華医学会との合同会議が行われた。また、両会は医学用語の翻訳作業や医療教育などさまざまな面で協力した。1929年の大会記録によると、両会は助産師問題共同委員会(**Joint Committee on Midwifery**)を設置し、助産師の教育問題への協力を求めた。そのほか博医会が1915年に設立した医学教育委員会(**Council on Medical Education**)も中華医学会と協力しており、このような両会の協力関係は、中国の医療教育に大きな影響を与えたと思われる。

一方、1927年における南京政府の樹立を画期として、中国の医学界を代表する連合協会が必要であるという声が高まった。1931年末、両会は *The China Medical Journal* と『中華医学雑誌』の英語版との合併版を1932年1月から発行することを決めた。合併版は、*The Chinese Medical Journal English Section* と名づけられた。

さらに1932年4月15日、両会の執行委員会は博医会と中華医学会の合併を正式に宣言した。新協会は中国名を「中華医学会」、英文での名称を **The Chinese Medical Association** とした。また、新協会の中には医療伝道に関する業務を担当する「教会医事委員会(**Council on Medical Missions**)」が設置された。

博医会が中華医学会と合併した後、博医会が行っていた医学用語の翻訳及び医学教育の主導権は、医療宣教師から中国人へと移った。一方、博医会の医療宣教師らは新しい中華医学会に残り、中国人と協力して中国医療の発展に努める道を選んだ。

四 合併の要因

医療宣教師は早くから自分たちの役割を中国人が代替すべきだと考えていた。このことは、今までの先行研究ではあまり注目されていないが、十分な留意に値する。1920年代以降は、このような医療伝道事業の土着化がより加速していく。その原因としては、1922年以降強まったナショナリズムや反キリスト教運動、それらに触発された「本色教会」運動の影響が挙げられる。たとえば1927年には激化する反キリスト教運動や北伐戦争の影響によって多くの外国人宣教師が任地を去ったが、その間満洲など一部の地域を除いて教会関

係事業の責任が中国人キリスト教徒に移された事例も少なくなかった。

一方で中国国内における政治的混乱は、欧米の支援者にも影響を与え、医療宣教師として派遣を希望する者は少なくなった。また不景気による財政悪化に悩んでいた宣教団体としては、新たに医療宣教師を派遣するより、中国人に医療伝道を任せることが望ましかった。実際のところ、中国における医療活動の担い手の中で、中国人の割合は相当大きな部分を占めるようになっていた。

中華医学会側の記事を分析してみると、合併の理由として医学界の統一ということが強調されていることがわかる。伍連徳は、中華医学会の会員が衛生部の次長や部長を担当しているので、中華医学会が全国医学界の中心になるべきだと主張した。つまり中華医学会の会員らは、政府の医学団体統制の動きのなかで、自分たちの権限をより拡大するため、自らが主導権を握るしかないと考えたのである。

一方で李濤は、近年の中国医学界の最も大きな恥辱は、英米派と独日派などに分裂していることだと指摘し、中華民国が完全な独立国として学術方面でも独立するためには、英米派や独日派ではなく、中華派を創立すべきだと主張した。しかし、1928年から議論されていた中華医学会と中華民国医薬学会の合併は挫折し、両会の対立状態は1932年に博医会と中華医学会が合併する時点においても続いていた。

第三章 医療と教育活動からみた土着化

一 ミッション系病院の経済的な自立を求めて

病院や診療所の運営については、*CMMJ* の病院報告書(Hospital Reports)や医療伝道統計(Medical Mission Statistics)など、さまざまな病院に関する統計資料が参照できる。病院報告書には病院の運営実態についての情報が載せられている。医療伝道統計は、各病院(Hospital)や診療所(Dispensary)のベッド数(病院の規模を表す)、外来患者数(Out-patients)、入院患者数(In-patients)、手術件数、職員や医学生数、病院の収入(治療費、薬の販売額、本国からの支援金)、支出などを調査したものである。また、各病院の責任者(医療宣教師)の名前及び所属宣教団体のことが書かれている。

当初、多くのミッション系病院は治療費を受け取っていなかったが、それは布教のためには多くの中国人を病院に引き付けることが必要とされたためである。しかし一方では、治療費を受け取ることが望ましいと考える医療宣教師も登場した。一方、裕福な人からは治療費を受け取り、貧乏な人は無料で治療することを支持する医療宣教師は徐々に増えていった。一方、当初医療宣教師の活動は、すべて本国からの寄付金に依存していた。そのため、寄付金の募集に苦勞していた多くの医療宣教師にとって有料治療は、病院の運営を続けるための唯一の選択肢であった。

このような内外の問題によって、多くのミッション系病院が患者から治療費を受け取る道を選んだ。もちろんキリスト教的愛を中国人に施すことがミッション系病院の理想であったため、治療費を常に満額で受け取ることは難しく、貧しい人の場合には無料で治療するというように、患者の状況によって選択的に治療費を受け取っていた。それではミッション系病院における経済的な自立は成功したのだろうか。1914年、ロックフェラー財団の中国医療調査委員会は、医師や看護師の給料を除けば、ミッション系病院の多くが宣教団体から経済的に自立していると評価した。

1930年に入ってから、ミッション系病院の自立が加速される。そこには、1929年末から始まった世界大恐慌の影響があった。当時中国における医療や教会事業のような教会関係事業は、外国の宣教団体からの支援に依存していたため、世界的な不景気によって宣教団体からの支援が減少したことは、中国教会に大きな打撃を与えたのである。このような危機を乗り越えるためには、中国人による自治及び経済的な自立が必要であると考えられた。

朱立徳によれば、この時期教会学校や病院は、宣教師や職員の給料を下げ、学生の数を減らす一方、中国国内で活発な募金活動を行った。ただ、政府の法案によって教会学校の校長に中国人を任命することが義務付けられたので、学校の行政権は中国人に移譲されたものの、経済権まで移管された学校はまだ少なかった。

病院の経済的な自立という問題は、土着化と密接に関連する。多くの医療宣教師は、将来的にはミッション系病院の運営を中国教会に委ねていくべきだと考えていた。そこで、ミッション系病院が土着化しても、以前のようにキリスト教的な精神が守られるかどうかは、医療宣教師や本国の宣教団体にとって大変重要な問題であった。とくに貧困者に対する無料診療を維持できるかどうかは、病院の伝道機関としての役割を示す基準となっていたので、本国の宣教団体からの支援金がなくても無料診療ができるよう、財政的な自立が必要であったのである。医療宣教師はこのような問題が解決されてから、土着化を進めようとしたのである。

二 医学教育をめぐる議論

有名な医療宣教師カー(J. G. Kerr)は、医学生教育は医療宣教師の重要な義務の一つであり、医学生教育によって西洋医学を普及させる一方、迷信的な伝統医学を消滅させることができると主張した。カーが1866年博済医院のなかに設立した博済医学校は、中国最初の西洋医学を教える正式な医学校として知られている。実際のところは医学校というより、病院のなかにある医学課程に近いものであったが、それは当初医学生教育の目的が、医療宣教師の管理下で働く助手を養成することにあつたからである。

医学生教育の最も重要な目的とは、中国人医師の養成によって、医療宣教師の負担を軽減させることであつた。医療宣教師は、病院の運営や患者の治療以外にも、宣教業務及び療養所の管理、医書の翻訳など過重な業務に苦しんでいた。医療宣教師の数が少なく、一人の医療宣教師が担当する仕事があまりにも多いことも、大きな問題であつた。実際、医療宣教師の数は1920年代になってもあまり増えなかつた。医療宣教師はこのような状況を、中国人医師の養成によって克服しようとしたのである。

20世紀に入ってから医療宣教師は、中国における医療伝道事業を維持・拡大するためには、中国人医師の養成が最も重要であることを強く感じた。しかし、以前のような規模の小さい医学校だけでは、水準の高い医学教育を行うことができない。つまり、中国が必要とす

る人材を確保することもできない。このような背景のなかで、いくつかの宣教団体が連合した形の協和医科大学の設立が推進された。小さな医学校は、より大きな医科大学に統合された。最初の協和医科大学である華北協和医科大学は、異なる教派を代表するいくつかの伝道会の協力によって、1904年に設立された。北京協和医科大学を始め、奉天、済南、漢口、成都、南京(杭州と共に)、福州、広東に連合医科大学が次々と設立された。

医科大学が次々と設立された大きな理由は、中国や外国政府関係の医学校との競争のなかで、ミッション系医学校における医学教育の水準を高めることが必要だという認識が広まったからである。また医科大学の設立や運営に必要な経費が非常に高かったことは、いくつかの宣教団体の資金や人材を一つに集中した協和医科大学が増える原因の一つとなった。

当初の医学校は、医療宣教師の方針あるいは地域の事情によって使用する言語が異なり、中国語やその現地方言で教えるところもあれば、英語で教えるところもあった。カーによって設立された中国最初の正式な医学校である博済医学校は、すべての科目を中国語で教えていた。教材としては、カーが中国語に翻訳した医学書が主に使われた。彼が中国語で医学を教えていた主な理由は、当時英語ができる学生がほとんどいなかったためであると考えられる。しかし、医学の場合には、最新の知識をすぐに受け入れることが大変重要であり、それは一部の医療宣教師が英語での医学教育を支持した理由の一つである。

一方、英語による教育と中国語による教育の共存を支持する人も現われた。1914年にベナブル(Wade Hampton Venable)は、医学を教える際に、中国語で教えることと、英語で教えることは、必ずしもお互いに排他的なものではないと主張した。彼は、中国の医療問題が西洋医学を学んだ医師の不足にあると考え、早期に多くの中国人西医を養成するためには、英語による医学教育と、中国語による医学教育の両方が必要であると主張した。また、英語で行われる医学教育のほうが、高い水準を持っていると考え、英語で学んだ医師が中国語で学んだ医師を指導し、中国での医学発展を導くという計画を支持していた。

しかし、中国語で医学を学んだ医師は、近代的医学知識を中国語で理解し活用することができるが、外国語で医学を学んだ医師の医学知識・用語・科学的表現は、結局のところその外国語に固定されてしまう。このような問題を解決するために、バルムは次のような方法を提案した。医学生は医学校に入る前にある程度の英語を身につける、学校に入ってからすべての教育は中国語で行うが、医学用語については英語と中国語の両方を教える。

このように1914年のCMJにおいて、医学教育における言語問題が大きく議論されたのは、

恐らく中国医療調査委員会や中国医療局が、英語での医学教育を支持したことに影響されたと思われる。中国医療調査委員会や中国医療局が英語による医学教育を支持したことに、多くの医療宣教師は危機感を持った。前述した医療宣教師の議論からみると、医療宣教師のなかでも英語での教育を支持する者と、中国語での教育を支持する者が対立していたことがわかる。しかし、英語で医学を教えることを主張した人のなかには、中国語版の教材が確保できれば、中国語で教えてもよいと思う人も少なくなかった。中国医療伝道教会が医学用語委員会や出版委員会を設置し、医学用語や医学書の翻訳に力を注いだのも、中国語による医学教育のためであった。翻訳作業に力を注いでいた医療宣教師にとって、北京協和医科大学がすべての科目を英語で教えるようになったことは、これまで続けられてきた翻訳活動が途絶するのではないかという危機感をもたらしたのである。

第四章 医学用語翻訳活動

一 医学用語委員会

医学用語委員会(Committee on Medical Terminology)は、1890年に上海で開催された第1次中国医療伝道協会大会において創設された。しかし医学用語委員会の本格的な活動は1901年から始まった。義和団運動の余波で上海に避難してきた会員らを中心に会議を開くことができたからである。第1次会議が終わって3年後の1904年、第2次及び第3次会議が開かれた。会議では組織学、解剖学、生理学、病理、薬物、手術、産科、婦人科、中薬学、細菌学関連の用語を整理した。一方、1905年には出版委員会(Publication Committee)が設立され、本格的に新しい用語を使った中国語翻訳書、とくに医学教材や雑誌を早期に編纂・出版することができるようになった。とくに1908年6月に出版された英漢医学用語辞典 *An English-Chinese Lexicon of Medical Terms* は、近代最初の医学用語専門辞典で、50年にわたる医療宣教師の努力と経験を集大成したものであった。

医学用語委員会が最初に着手した作業は解剖学用語で、その中でも骨と関わる用語の翻訳であった。ホイットニーは、現在使われている医学訳語〔骨名〕がむやみに長すぎて、医学生が勉強するのに障害になっているので、不必要な漢字を省略するか、意味は同一のまま、短いものにすることで、より簡明な用語を作るべきだと主張した。漢字の部首を統一させて、覚えやすくする方法も考案された。第1次会議の報告には、「頭骨を除いて、すべての骨名は必ず部首として骨偏を付け加えなければならない。手の骨は「扌」を、足の骨は「足」を部首にしなければならない」という内容が見える。

しかし医療宣教師が作った用語には、問題点も少なくなかった。俞鳳賓は、中国にその物自体がないためそれを意味する中国語がなく、新しい用語でも表現できない場合には、新漢字を作ることが必要ではあるが、やはり上策は新漢字を作らないことであり、作るにしても少数に限定すべきであると主張した。結局のところ、骨名のうち医療宣教師が作った新漢字は、中国人の賛同を得ることができなかつたため、ほかの用語に変更された。

医学用語委員会は自分たちが訳した用語を普及させるために努力したが、これは容易ではなかった。委員会は *An English-Chinese Lexicon of Medical Terms* を清政府の学部提出することで政府の認定を受けようと試みたが、これを拒否された。そこで医療宣教師は、中国政府や中国人団体との一層の協力が必要であると痛感した。中国人との協力を求めるな

かで、1915年に江蘇省教育会との談話会を開くことになったのは大変重要である。

二 中国人との協力

1915年2月12日、博医会の出版・用語委員会は江蘇省教育会と会談を持ち、医学用語の翻訳においてどのように協力していくかについて議論した。続いて第2次談話会は1916年1月16日に、第3次談話会は1916年2月12日に開かれた。第3次談話会には博医会と江蘇省教育会だけではなく、中華医学会、中華民国医薬学会、江蘇省医学専門学校、浙江省医薬専門学校、福州陸軍医院、杭州医薬学会の代表者らが参加した。すなわち第3次談話会からは欧米式の医学教育を受けた人々と日本式の医学教育を受けた人々、医学教育を受けていない人々など、さまざまな背景を持った人々が参加し、ばらばらに行われていた医学用語の制定が統一性をもつようになったのである。博医会が談話会を開いた目的も、江蘇省教育会及び各医学団体との協力によって、より完璧な用語を決定することが可能になると期待していたからである。

医学用語審査会(Union Committee on Medical Terminology)は、1916年の第3次医学用語談話会において、博医会・中華医学会・中華民国医薬学会・江蘇省教育会など四つの団体によって結成された。医学用語審査会は1916年8月7日から14日まで第1次大会を開催した。第2次大会は1917年1月11日から17日まで開かれ、第1次大会に参加した四つの団体以外に、理科教授研究会も参加した。続いて同年の8月には第3次大会が開かれた。両大会では解剖学用語組と化学用語組に分かれて解剖学用語と化学用語等について議論した。また医学用語審査会は、同年の8月27日に教育部から正式に認定され、審査会で決められた用語は政府から公式の訳語として認められることとなった。1918年7月には第4次大会が開かれ、解剖学用語組と化学用語組、細菌学用語組に分かれて議論が行われた。計4回の大会を経て、大部分の用語が定められ、とくに解剖学用語については審査が終わった。

第4次大会において医学用語審査会は「科学用語審査会」と改称し、医学用語のみならず、ほかの科学分野の用語についても翻訳作業を進めることになった。科学用語審査会は、元々医学用語審査会から出発したために、医学用語以外の科学分野の用語の場合は専門性や代表性が弱かった。しかし、医学用語の場合は、全国規模の医学団体が参加していたので、科学用語審査会が担当したほかの分野と比べて、専門性が高かったと考えられる。博医会は、審査会に参加した医学団体の中で唯一の外国人中心の団体として、医学用語を翻

訳する際に、独自の役割を果たしていたといえよう。

三 医療宣教師の用語翻訳活動に対する評価

今までの先行研究では、来華宣教師が翻訳した用語が不完全であるという指摘が多かった。その原因としては、①宣教師の専門知識の不足、②宣教師の中国語力や、中国人協力者の外国語力の不足、③宣教師の間での意見対立、④和製漢語を多く採用したことなどが挙げられる。しかし、医学用語委員会で活動していた医療宣教師は、基本的に医学を専攻した医師であり、十分な専門知識を持っていた。2番目の語学力の問題は確かにあるが、留学生の帰国及び医学校卒業生の増加、中華医学会のような中国人医学団体の設立によって、克服できるようになった。英語が流暢で、西洋医学の知識を持った中国人医師が翻訳作業において重要な役割を担ったからである。3番目については、医学用語委員会や審査会の設立によって、意見を調整することができたので、宣教師の間での対立は少なかったと思われる。最後に、医学用語委員会は日本で使われている用語のなかで、適当であると判断された用語のみを借用することにした。先行研究では、医療宣教師の用語より和製漢語のほうが広く使われていたことから、医療宣教師の用語翻訳が失敗したと指摘されているが、それよりは、医療宣教師が和製漢語を利用しながら、より良い用語を選ぶために努力したことを評価すべきであろう。とくにミッション系医学校においては、医学用語委員会の用語が広く使われた。さらに、医学用語委員会の用語の中には、現在まで広く使われている用語も多数存在する。

第五章 医療宣教師と中国伝統医学—中薬研究を中心に

一 医療宣教師の中薬研究

中国の植物に関する調査の中で、最も大きな部分を占めていたのは薬草であった。18世紀後半からはプロテスタント宣教師によって中薬学研究が行われた。最も注目すべき作業としては、漢口で活動した医療宣教師スミス(Frederick Porter Smith)の *Contributions towards the Materia Medica & Natural History of China: For the Use of Medical Missionaries & Native Medical Students* が挙げられる。本書は、中薬学と博物学に関する調査内容を叙述した上、有益な中薬をまとめており、医療宣教師が最も参考にしたものである。内容の大半は『本草綱目』からの翻訳である。

CMMJ にも、中薬に関する記事が多く載せられている。1887年の創刊号から1889年までは、カー、ニール(J. B. Neal)、ダウスウェイト(A. W. Douthwaite)が中薬関連の記事を寄稿した。カーは、協会が中薬に関する研究に注意を払うべきだと考えていた。調査の結果は、医療宣教師が中薬に関する情報を共有できるよう、雑誌に寄稿することが望まれた。1888年にニールは、中国の鉱物性薬材を紹介する文章を掲載した。同年にダウスウェイトは、14年間の経験に基づき、医療宣教師が使える中薬について紹介した。

中国医療伝道協会の医療宣教師は、中薬の体系的な調査・研究が必要であると感じ、1890年の中国医療伝道協会大会において中薬学委員会(Committee on Chinese Materia Medica)の創立を決定した。中薬学委員会も医学用語委員会と同じように、報告書を提出した。1891年に発表されたニールの「済南府(Chinanfu)の鉱物性薬材」は、中薬学委員会の最初の報告書である。この報告書は、ニール自身が現地の薬舗で約60種の薬材を購入して実験を行った結果である。1907年の報告でウィルソン(William Wilson)は、中国の材料や器具を利用して医療用アルコールや亜硝酸エチルなどを製造する方法はもちろん、中国現地で購入できる有用な薬材について紹介している。

この時代の最も重要な成果としては、スミスの本をスチュアート(G. A. Stuart)が修正・補充し、1911年に出版した *Chinese Materia Medica: Vegetable Kingdom* [中国薬物学—植物界] があげられる。スチュアートは、1900年から1911年まで11年間かけてこの本を完成させたが、不幸なことにスチュアートの死により、動物性薬材や鉱物性薬材に関する部分は未完に終わった。

中薬学委員会の解散に関する記録は見つからないが、1908年のウィルソンの記事を最後に委員会関連の記事が見つからないので、1908年以降に解散したと推測できる。CMJの中薬に関する記事は、1909年から1919年まではほとんど見られないが、1920年から再び増える傾向をみせる。つまり1911年にスチュアートの『中国薬物学——植物界』の出版を期に中薬研究は一段落し、その後1920年代前後から再び関連の研究が行われたといえよう。

1920年代前後からの中薬研究を主導したのは、北京協和医科大学薬理室の研究者たち、リード(Bernard Emms Read)やシュミット(Carl Frederic Schmidt)、陳克恢(K. K. Chen)などである。1923年からは、博医会の研究委員会(Research Committee)の下に「中薬の調査および薬理学分科委員会(Sub-committee on Pharmacology and the Investigation of Chinese Drugs)」が設立され、中薬研究が再開された。研究委員会は、中国人の治療法を分析するために、すべての医師がそれに関する情報を集め、リードのような化学者に提供すべきだと主張した。

二 中薬研究の目的

当初医療宣教師が中薬について研究した主な理由は、中国での医療活動において必要な治療薬が不足していたからである。ダウスウェイトは、中薬には不純な成分あるいは不確実な成分が入っていることが多いが、そのなかで精製できるものもあり、必要な設備もほとんど揃っているので、中国で必要な西薬を作ることができるかと主張した。1908年にウィルソンは、中薬の多くは西洋の薬典に属するもので、西洋の薬材と同様に品質がよいので、現地の薬材を利用するのは便利で経済的にも有利であると述べている。

最後に、輸入薬の値段が高いことも、中薬を研究する原因の一つであった。つまり、比較的安い中国の薬材を利用して薬を製造・販売することは、医療宣教師に付随的な利益をもたらしたのである。

このように、当初医療宣教師が中薬研究の必要性を感じた背景としては、西薬を扱う外国商社や薬舗が大都市に集中しており、内陸の小都市では西薬を入手することが難しかった点、西洋から輸入された一部の薬の品質が低く、十分な効果を期待しにくかった点、中薬を利用して安く薬を製造できた点が挙げられる。つまり、初期の医療宣教師の中薬研究は、中薬への理解を深めるためではなく、単に医療活動において必要な治療薬——西薬——を確保するために、中薬のなかで西洋の薬材と同様のものを発見することに主な関心があった。

しかし、1920年代前後からは、西薬を作るために中薬を調査するにとどまらず、中薬そのものに注目して、科学的方法によって中薬の価値を明らかにしようとする気運が現れた。たとえば、1916年に *CMJ* の編集者は、中薬のなかには疾病の治療に驚くほど効果的なものがあることが明らかになっていると述べ、中薬に対する偏見のない調査、科学的な方法による検証が必要であると主張した。1920年代の中薬研究を主導したリードは、「我々は近代科学によって調査されていない中薬の未知の潜在力に注目すべきである」と主張した。

三 医療宣教師の中国伝統医学に対する認識

先行研究は、医療宣教師の中国伝統医学に対する認識が排斥から「同情的理解」に変化したと述べている。しかし、中国医学への同情的〔共感的〕理解とは、西洋科学やキリスト教の優越性を認めた上での、また中国医学が西洋医学に代替されることを前提とした上での理解にすぎなかった。医療宣教師が、中国の古代医学が如何に素晴らしかったかを強調していることも、中国医学は歴史上の価値しか持っていないと考えていたからではないだろうか。

また、医療宣教師が残した文章からみると、伝統医学を批判する者と、伝統医学に興味を示す者は、どの時期にも存在しており、中薬のように利用できる部分については肯定的に評価し、科学的に究明できない理論的な部分——陰陽五行説など——については単に患者との交流のために理解するくらいに留めようとする認識も、基本的にあまり変わらなかったとも言えよう。

もちろん時間が経つにつれ、中国医学を理解する必要性が高まっており、なかでは鍼治療のように、医療宣教師の認識が否定的なものから肯定的なものに変化した分野もあったのは確かである。このような変化は医療宣教師の役割の変化とも関連する。当初、医療宣教師は、医療伝道の正当性を立証するために、中国医学の非科学的な面を強調していたが、医療宣教師の専門化とともに、中国医学を理解する必要性が高まった。それは、当時の中国人が中国医学を深く信じていたからである。

一方で医療宣教師は、基本的に西洋医学の優越性を強く信じ、中国に必要なのは科学的な西洋医学に違いないと考えていた。中国人西医も基本的に西洋医学を信奉し、中薬などの一部を除いて、中国医学は歴史上の価値しか持っていないと考えていた。王吉民はその代表である。彼は、過去の中国では診脈が大変効果的であったと、初期の医療宣教師の診

脈に対する批判に反駁しながらも、より正確で信頼できる西洋医学の診断法が広がっている現在の状況からみると、診断法としての診脈の実用的価値は低くなり、結局のところ診脈は医学史のなかでの興味深い事実か、昔の中国が医学に寄与した部分として扱われることになるに違いないと述べている。彼の記事は、その内容の深さというより、多くの外国人医師が購読している雑誌に英語で書かれたという点で意味があると言えよう。

結論

本論文は近代中国の社会や医療に大きな影響を与えたプロテスタント医療宣教師の団体である中国医療伝道協会を取り上げ、その活動を明らかにするとともに、医療伝道の土着化について論じたものである。

まず第一章では、医師と宣教師という二つの顔を持った医療宣教師のアイデンティティ問題について考察し、医療宣教師の活動の重点が、時代とともに福音伝道から医療活動及び医学教育に移っていったこと、そのような変化がとくに1920年代から加速したことを明らかにした。第二章では、1907年から1932年までの博医会の変化及び中華医学会との合併に至る過程を考察した。博医会と中華医学会の合併は、医療伝道事業の土着化過程が最もよく表れた出来事ともいえよう。第三章では、医療宣教師が実際に活動していた場であるミッション系病院や医学校における土着化について、病院の経済的自立や医学校における教授言語をめぐる議論を中心に分析した。第四章では、中国医療伝道協会が1890年に設立した医学用語委員会の活動を中心に、医療宣教師が医学用語の翻訳や統一に尽力し、統一された用語に基づいて医学書を編纂するなど、中国での西洋医学教育の体系化に努めていたことを明らかにした。第五章では、医療宣教師の中国医学、特に中薬に対する研究や認識について考察することで、西洋医学の土着化過程における西洋医学と中国医学の相互作用の一面を示そうと試みた。

最後に、中国医療伝道協会が中国における西洋医学の発展に与えた影響について簡単に述べたい。中国医療伝道協会の設立前、医療宣教師の活動は各教派・宣教団体の方針によって、また医療宣教師が活動している地域の状況や医療宣教師自身の個性によって異なっていた。そこで、中国医療伝道協会は教派を超えた協力を目指し、医療宣教師の間における情報交換の場として機能した。本論文は、中国医療伝道協会が成立した1886年から中華医学会に合併される1932年までの期間を主な考察対象とした。しかし、博医会と中華医学会の合併によって、中国における医療宣教師の役割が完全に終わったわけではない。この時点で教会医療伝道事業の土着化は、まだ進行の過程にあった。それは医療宣教師が目指していた土着化が、あくまでもキリスト教の慈善事業としての性格が守られた形での土着化であったことと関連する。つまり、中国教会やクリスチャン中国人医師がミッション系病院を直接管理、運営できるまでは、外国人医療宣教師が必要である、と彼らは考えていた。このような状況は、その後も長い間続いていたと考えられる。

文献一覽

史料

- 北京協和医学校『青年会第三次報告書』(1917年)[上海市档案館所藏、U120-0-91]。
- 陳邦賢『中国医学史』商務印書館、1937年(山本成之助訳『中国医学史』科学書院、1989年)。
- 程瀚章『西医淺說』(商務印書館、1934年)。
- 福建省政協文史資料委員会編『文史資料選編』5卷(福建人民出版社、2000年)。
- 花之安『自西徂東』(光緒十九年漢鎮英漢書社排印本)。
- 惠亨通『体学新編』(福州美部公会、1904年)[北京国家図書館古籍館所藏]。
- 教会医事委員会『教会医事委員会会刊』(中華医学会、1950年)[上海市档案館所藏、U123-0-120]。
- 教会医事委員会『教会医事委員会会刊』(中華全国基督教協進会、1950-1951年)[上海市档案館所藏、U123-0-120]。
- 柯為良·林鼎文編訳『全体闡微』(福州聖教医館、1881年)[北京国家図書館古籍館所藏]。
- 柯為良·林鼎文編訳『全体闡微』(福州聖教医館、1898年)[北京国家図書館古籍館所藏]。
- 林樂知主編『万国公報』(華文書局影印本、1968年)。
- 『申報』1872-1949(上海書店影印本、1983年)。
- 王吉民『医院宗教事工叢刊之一——医院宗教事工会議特刊』(中華医学会、1950年)[上海市档案館所藏、U123-0-43]。
- 王吉民『医院宗教事工叢刊之二——医院布道經驗談』(中華医学会、1950年)[上海市档案館所藏、U12-0-165]。
- 伍連德·伍長耀編『海港檢疫管理所報告書』(1933年)。
- 中華統行委辦会『中華基督教会年鑑』1-10(中国教会研究中心、橄欖文化基金会影印本、1983年)。
- 中華医学会編『中華医学雜誌』(中華医学会、1915-1932年)。
- 中西医学研究会『中西医学報』(1910-1930年)[中華全国図書館文献縮微中心マイクロフィルム版、東京大学文学部所藏]
- 朱士嘉編『十九世紀美国侵華档案史料選輯』(中華書局、1959年)。

- 東亜研究所編『米国系プロテスタント教団ノ文化事業統計表——未定稿』(東亜研究所、1940年)。
- ドクトル・ライヒマン(同仁会訳)『中華民国医事衛生の現状』(同仁会、1930)。
- 富坂キリスト教センター編『原典現代中国キリスト教資料集——プロテスタント教会と中国政府の重要文献1950-2000』(新教出版社、2008年)。
- Abend, Hallett. “The Crisis of Christian Missions in China”, *Current History*, 32(5), 1930.
- American Board of Commissioners for Foreign Missions, *Report of the Jubilee Year of the Foochow Mission of the A. B. C. F. M. 1896*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1897.
- American Board Mission, *Foochow Messenger*, Foochow: American Board Mission, 1903-1922.
- Balme, Harold. *China and Modern Medicine: A Study in Medical Missionary Development*, London: United Council for Missionary Education, 1921(丸川仁夫訳『支那と近代医学——支那医療伝道史』新生堂、1941)。
- Bliss, Edwin Munsell et al., *The Encyclopedia of Missions: Descriptive, Historical, Biographical, Statistical*, 2nd ed., New York: Funk & Wagnalls Co., 1904.
- Bretschneider, Emil. *Botanicon Sinicum: Notes on Chinese Botany from Native and Western Sources*, London: Trübner & Co., 1882.
- Bulletin of the Council on Christian Medical Work (Occasional Leaflet)*, Shanghai: The National Christian Council of China and the Council on Christian Medical Work of the Chinese Medical Association, no. 36-45, 1947-1949[上海市档案馆所蔵、U123-0-191]
- Cadbury, William Warder and Jones, Marie Hoxie. *At the Point of a Lancet: One Hundred Years of the Canton Hospital 1835-1935*, Shanghai: Kelly and Walsh, 1935.
- China Centenary Missionary Conference Records (1907)*, New York: American Tract Society, 1907.
- China Medical Commission of Rockefeller Foundation, *Medicine in China*, New York: University of Chicago Press, 1914.
- Chinese Educational Commission, *Christian Education in China: The Report of the China Educational Commission of 1921-1922*, Shanghai: Commercial Press, 1922.
- Christie, Dugald. *Thirty Years in Moukden 1883-1913*, edited by his wife, London: Constable, 1914(矢内原忠雄訳『奉天三十年(上)(下)』岩波書店、1938年)。

- Church Missionary Society Archive, *Mercy and Truth, 1897-1921*, Marlborough, Wilts.: Adam Matthew Publications, 1998 [マイクロフィルム版、香港大学図書館所蔵]
- Committee on Medical Terminology, *Terms in Anatomy, Histology, Physiology, Pharmacology, Pharmacy*, First report of the Committee, Shanghai, 1901 [東洋文庫所蔵]
- Committee on Medical Terminology, *Terms in Pathology, Medicine, Surgery, Obstetrics, Gynecology*, Second report of the Committee, Shanghai, 1904[東洋文庫所蔵]
- Council on Medical Missions Prayer Cycle*, Shanghai: The Chinese Medical Association, 1940-1941[上海市档案馆所蔵、U123-0-58]
- Cousland, Philip B. *An English-Chinese Lexicon of Medical Terms* [医学辞彙], Shanghai: Medical Missionary Association of China, 1908.
- Doolittle, Justus. *Social Life of the Chinese*, New York: Harper & Brothers, 1865.
- Doolittle, Justus. *Vocabulary and Hand-book of the Chinese Language, Romanized in the Mandarin Dialect*, Foochow: Rozario, Marcal and Company, 1872.
- Faber, Knud. *Report on Medical Schools in China, Series of League of Nations publications 3, Health*, Geneva: League of Nations, 1931.
- Gamewell, Mary Ninde. *New Life Currents in China*, New York: Missionary Education Movement of the United States and Canada, 1919.
- Giles, Herbert A. *A Chinese-English Dictionary*, Shanghai: Kelly & Walsh, 1892.
- Gordon, Charles Alexander. *An Epitome of the Reports of the Medical Officers to the Chinese Imperial Maritime Customs Service, from 1871 to 1882: with Chapters on the History of Medicine in China, Materia Medica, Epidemics, Famine, Ethnology, and Chronology in Relation to Medicine and Public Health*, London: Baillière, Tindall, & Cox, 1884.
- Hanbury, Daniel. *Notes on Chinese Materia Medica*, London: Printed by J. E. Taylor, 1862.
- Hobson, Benjamin. *A Medical Vocabulary in English and Chinese*, Shanghai: Shanghai Mission Press, 1858.
- Hume, Edward H. “The Contributions of China to the Science and Art of Medicine”, *Science*, 59(1529), 1924.
- Hume, Edward H. *Doctors East Doctors West: An American Physician's Life in China*, New York: W. W. Norton, 1946(杜麗紅訳『道一風同——一位美国医生在華30年』中華書局、2011年)。
- Hume, Edward H. *The Chinese Way in Medicine*, Westport, CT.: Hyperion Press, 1940.

- Jefferys, William Hamilton and Maxwell, James L. *The Diseases of China: Including Formosa and Korea*, Philadelphia: P. Blakiston's son & co., 1910.
- Kerr, J. G. & Mo Wan-tun, *A Vocabulary of Diseases, Based on Dr. Thomson's Vocabulary and Dr. Whiney's Anatomical Terms*, Prepared for the Committee on Medical Nomenclature of the Medical Missionary Association of China, 1898.
- Kilborn, Omar Leslie. *Heal the Sick: An Appeal for Medical Missions in China*, Toronto: Missionary Society of the Methodist Church, 1910.
- Lambuth, Walter Russell. *Medical Missions: The Twofold Task*, New York: Student Volunteer Movement for Foreign Missions, 1920.
- Lennox, William G. "Medical Missions", Petty, Orville A(ed.). *China: Laymen's Foreign Missions Inquiry*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1933.
- Lockhart, William. *The Medical Missionary in China: A Narrative of Twenty Years' Experience*, London: Hurst and Blackett, 1861.
- Lowe, John. *Medical Missions: Their Place and Power*, London: Fleming. H. Revell Company, 1903.
- MacGillivray, Donald. *A Century of Protestant Missions in China (1807-1907)*, Shanghai: The American Presbyterian Mission, 1907.
- Moore, Edward Caldwell. *General Report of the Deputation Sent by the American Board to China in 1907*, Boston: The Board Congregational House, 1907.
- National Medical Association of China, *The National Medical Journal of China*, Shanghai, 1915-1931.
- News Letter, Council on Christian Medical Work*, Shanghai: The Chinese Medical Association & the National Christian Council of China, no. 1, 1950[上海市档案館所藏、U123-0-120]
- Occasional Leaflet Organ of the Council on Medical Missions*, Shanghai: The Chinese Medical Association, no. 31-35, 1940-1941[上海市档案館所藏、U123-0-119]
- Osgood, D. W. *Anatomical Vocabulary in English and Chinese* (『全体闡微』清光緒7年1881卷末) [北京国家圖書館古籍館所藏]。
- Osgood, Elliott I. *Breaking down Chinese Walls from a Doctor's Viewpoint*, New York: Fleming H. Revell Company, 1908.
- Rawlinson, Frank(ed.). *The China Christian Year Book 1926: Fourteenth Issue of the China*

- “Mission” Year Book, Reprinted by Ch’eng Wen Publishing Company, Taipei, 1973.
- Read, Bernard E. and Pak, C. *A Compendium of Minerals and Stones Used in Chinese Medicine from the Pen Ts’ao Kang Mu, Li Shin Chen 1597, A.D.*, Peiping: The Peking Society of Natural History, 1928.
- Read, Bernard E. *Chinese Materia Medica, Animal Drugs*, Peking: Peking Natural History Bulletin, 1931.
- Read, Bernard E. *Chinese Materia Medica, Avian Drugs*, Peking: Peking Natural History Bulletin, 1932.
- Read, Bernard E. *Chinese Medicinal Plants from the Pen Ts’ao Kang Mu* [本草綱目] A. D. 1596 of a Botanical, Chemical and Pharmacological Reference List, Taipei: Southern Materials Center [南天書局], 1977.
- Read, Bernard E. *Famine Foods Listed in the Chiu Huang Pen Ts’ao* [救荒本草] & *The Botany of Mahuang* [麻黃] & *Common Food Fishes of Shanghai*, Taipei: Southern Materials Center [南天書局], 1977.
- Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai (1877)*, Shanghai: Presbyterian Mission Press, 1878.
- Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai (1890)*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1890.
- Report of the International Plague Conference: Held at Mukden, April, 1911*, Manila: Bureau of Printing, 1912.
- S. O. A. S., *London Presbyterian Church of England Foreign Missions Archives, 1847-1950*, Leiden; Zug : IDC. - Tokyo: distributor, Nauka, 1986. [マイクロフィルム版、東京大学文学部所蔵]
- Smith, Frederick Porter. *Contributions towards the Materia Medica & Natural History of China: For the Use of Medical Missionaries & Native Medical Students*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1871.
- Stauffer Milton T(ed.). *The Christian Occupation of China: A General Survey of the Numerical Strength and Geographical Distribution of the Christian Forces in China*, Shanghai: China Continuation Committee, 1918-1921(中華続行委辦会調査特委会『1901-1920年中国基督教調査資料(修訂)(上下)』中国社会科学出版社、2007年)。

- Stevens George B. and Markwick, W. Fisher. *The Life of Peter Parker, M. D.*, Boston: Congregational Sunday School and Publishing Society, 1896.
- Stuart, George Arthur. *Chinese Materia Medica, Vegetable Kingdom: Extensively Revised from F. Porter Smith's Work*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1911.
- The China Christian Year Book*, Shanghai: Christian Literature Society, 1929-1935.
- The China Medical Journal*, Shanghai: The China Medical Missionary Association, 1907-1925.
- The China Medical Journal*, Shanghai: The China Medical Association, 1925-1931.
- The China Medical Missionary Journal*, Shanghai: The China Medical Missionary Association, 1887-1907.
- The China Mission Year Book*, Shanghai: Christian Literature Society for China, 1910-1925.
- The Chinese Medical Journal English Section*, Shanghai: The Chinese Medical Association, 1932-1934.
- The Chinese Recorder*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1912-1938.
- The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Foochow: Rozario, Marcal, 1868-1912.
- The Chinese Year Book*, Shanghai: Distributed by Commercial Press, 1937.
- The Thirty-third Annual Report of Ponasang Missionary Hospital, Foochow, China, for the Year Ending December 31st, 1904*[東洋文庫所藏]
- West China Missionary Conference Report (1908)*, Chengtu: Canadian Methodist Mission Press, 1908.
- Whitney, H. T. *A Glossary of English and Chinese Anatomical Terms according to the Old and New Medical Nomenclatures*(『体学新編』卷末), 1906[東洋文庫所藏]
- Williams, Samuel Wells. *A Syllabic Dictionary of the Chinese Language: Arranged according to the Wu-fang Yuen yin, with the Pronunciation of the Characters as Heard in Peking, Canton, Amoy, and Shanghai*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1896.
- Wong K. Chimin(王吉民) and Wu Lien-the(伍連德), *History of Chinese Medicine :Being a Chronicle of Medical Happenings in China from Ancient Times to the Present Period*, Tientsin: The Tientsin Press, 1932.
- Wu, Lien-The (ed.). *Manchurian Plague Prevention Service: Memorial Volume, 1912-1932*, Shanghai: National Quarantine Service, 1934.
- Young People's Forward Movement, *Our West China Mission: Being a Somewhat Extensive*

Summary by the Missionaries on the Field of the Work during the First Twenty-five Years of the Canadian Methodist Mission in the Province of Szechwan, Western China, Toronto: Missionary Society of the Methodist Church, 1920.

和文(著者名五十音順)

- アジア史研究会『東洋基督教史研究論文目録稿』(アジア研究会、1955年)。
- 阿部洋「一九二〇年代満州における教育権回収運動——中国近代教育におけるナショナルリズムの一側面」(『アジア研究』27(3)、1980年)。
- 飯島渉『ペストと近代中国』(研文出版、2000年)。
- 『マラリアと帝国——植民地医学と東アジアの広域秩序』(東京大学出版会、2005年)。
- 『感染症の中国史——公衆衛生と東アジア』(中央公論新社、2009年)。
- 石川禎浩「1920年代中国における「信仰」のゆくえ——1922年の反キリスト教運動の意味するもの」(狭間直樹編『1920年代の中国』汲古書院、1995年)。
- 石川照子「近代上海のキリスト教とジェンダー」(『歴史評論』765、2014年)。
- 石田秀実『中国医学思想史——もう一つの医学』(東京大学出版会、1992年)。
- 石原謙「中国傳道の開拓者」(『東京女子大学論集』1(1)、1950年)。
- 「中国プロテスタント宣教史——概観と時代区分」(『東京女子大学論集』4(1)、1953年)。
- 笠原陽子「フィリピン・レポートと中国の禁煙運動」(『人間文化論叢』9、2006年)。
- 蒲豊彦「宣教師、中国人信者と清末華南郷村社会」(『東洋史研究』62(3)、2003年)。
- 「キリスト教と近代中国社会——魂の救済から社会の救済へ」(ひろたまさき・横田冬彦編『異文化交流史の再検討——日本近代の「経験」とその周辺』平凡社、2011年)。
- 「中国の地域研究とキリスト教」(『歴史評論』765、2014年)。
- 倉田明子・魏郁欣「中国キリスト教史基礎文献・所蔵機関案内」(『歴史評論』765、2014年)。
- 小檜山ルイ「アメリカにおける海外伝道研究の文脈とその現在」(『日本研究』30、2005年)。
- 佐伯好郎『清朝基督教の研究』(春秋社、1949年)。
- 佐藤仁史「近代江南の漁民と天主教」(『歴史評論』765、2014年)。

- 徐亦猛「中国におけるキリスト教本色化運動——誠静怡についての考察」(『アジア・キリスト教・多元性』6、2008年)。
- 「中国におけるキリスト教本色化運動——西洋宣教師の動向についての考察」(『アジア・キリスト教・多元性』7、2009年)。
- 孫建軍「西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界」(『日本研究』30、2005年)。
- 沈国威『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容』(笠間書院、2008年)。
- シービングー, ロンダ(小川眞里子・弓削尚子訳)『植物と帝国——抹殺された中絶薬とジェンダー』(工作舎、2007年)。
- 武上真理子「孫文と医学——『紅十字会救傷第一法』をめぐって」(『文明構造論——京都大学大学院人間環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集』5、2009年)。
- 千葉謙悟『中国語における東西言語文化交流——近代翻訳語の創造と伝播』(三省堂、2010年)。
- 土肥歩「宣教師と中国近代——各国の研究動向を中心に(第25回青山学院大学史学会大会報告)」(『史友』38、2006年)。
- 「清末在外中国人と中国キリスト教布教事業——在ニュージーランド中国人と広州郷村布教団を中心に」(『東洋学報』94(3)、2012年)。
- 「「南洋」と「地域社会」をむすぶキリスト教」(『歴史評論』765、2014年)。
- 戸部健「中華民国北京政府期における通俗教育会」(『史学雑誌』113(2)、2004年)。
- 「近代中国における通俗衛生知識——天津(1912~45年)の事例から」(『歴史学研究』834、2007年)。
- 「中国、特に華北YMCA史研究の動向」(『歴史評論』765、2014年)。
- 永田小絵「中国清朝における翻訳者および翻訳対象の変遷」(『通訳研究』6、2006年)。
- 服部伸『近代医学の光と影』(山川出版社、2004年)。
- 傅維康主編(川井正久編訳)『中国医学の歴史』(東洋学術出版社、2000年)。
- 福士由紀『近代上海と公衆衛生——防疫の都市社会史』(御茶の水書房、2010年)。
- 帆刈浩之「中国伝統医学の「近代」——民国初期における中国医学廃止をめぐって」(『近きに在りて』39、2001年)。
- 松本秀士「近代解剖学への萌芽における日中比較身体論」(『或問』9、2005年)。
- 「人体解剖学の専門書『全体闡微』の解剖学用語について」(『或問』12、2006年)。
- 「清末刊行の中国文人体解剖学書について」(『日本医史学雑誌』53(4)、2007年)。

- 「動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究」(『或問』14、2008年)。
- 「中国における西洋解剖学の受容について——解剖学用語の変遷から」(『或問』15、2008年)。
- 「「精」の概念をめぐる西医東漸における中国解剖学用語の変遷」(『或問』16、2009年)。
- 「「神経」と東西身体思想の諸相——近代中国における医療宣教師創出の訳語をめぐる」(『語彙研究』7、2009年)。
- 「西医東漸をめぐる「筋」の概念と解剖学用語の変遷」(『或問』17、2009年)。
- 見市雅俊他編『疾病・開発・帝国医療——アジアにおける病気と医療の歴史学』(東京大学出版会、2001年)。
- 山本真「二〇世紀初頭の福建南西部客家社会と革命運動——宣教師文書から読み解く」(『歴史評論』765、2014年)。
- 山本澄子『中国キリスト教史研究 増補改訂版』(山川出版社、2006年)。
- 姚毅『近代中国の出産と国家・社会——医師・助産士・接生婆』(研文出版、2011年)。
- 吉澤誠一郎『天津の近代——清末都市における政治文化と社会統合』(名古屋大学出版会、2002年)。
- 吉田寅「中国新教伝道の開拓と宣教師の中国文布教書」(『研究紀要』1、1963年)。
- 「中国医療伝道と宣教師の中国語医学書(昭和 63 年度定例会発表要旨)」(『立正大学人文科学研究所年報』26、1989年)。
- 「中国医学史研究の回顧」(『立正大学文学部論叢』100、1994年)。
- 「中国キリスト教初期医療伝道史研究——ホブソン著中国語医学書の一考察」(『立正大学文学部研究紀要12』、1996年)。
- 『中国プロテスタント伝道史研究』(汲古書院、1997年)。
- 『宣教師刊中国語医学書と関連資料——中国プロテスタント初期医療伝道の資料的考察』(立正大学東洋史研究室、1997年)。
- 渡辺祐子「近代中国におけるプロテスタント伝道——「反発」と「受容」の諸相」(東京外国語大学博士論文、2006年)。
- 「中国プロテスタント伝道研究の視角」(『キリスト教史学』61、2007年)。
- 「プロテスタント伝道前半史概説——1907年から義和団まで」(加藤実・渡辺祐子共編『中国プロテスタント史研究史料』明治学院大学キリスト教研究所、2009年)。

中文(著者名ピンイン順)

- 陳建明「近代基督教在華醫療事業」(『宗教学研究』2、2000年)。
- 陳勝昆『医学·心理·民俗』(天津百花出版社、2004年)。
- 陳維益編『英漢医学辞典』(上海科学技術出版社、1984年)。
- 陳新謙·張天祿編著『中国近代藥学史』(人民衛生出版社、1992年)。
- 陳支平·李少明『基督教与福建民間社会』(廈門大学出版社、1992年)。
- 崔軍鋒「中国博医会与中国地方疾病研究(1886-1911)——以『中国疾病』一書為中心的考察」(『自然弁証法通訊』5、2010年)。
- 丁韋良(沈弘訳)『花甲憶記——一位美国伝教士眼中的晚清帝国』(広西師大学出版社、2004年)。
- 高晞「德貞的西医学訳著」(『中華医史雜誌』4、1995年)。
- 「伝教和行医——不同道不相為謀」(『自然弁証法通訊』4、1996年)。
- 「“解剖学”中文訳名の由来与確定——以德貞『全体通考』為中心」(『歴史教学』6、2009年)。
- 『德貞伝——一個英国伝教士与晚清医学近代化』(復旦大学出版社、2009年)。
- 顧劍徵「昔日寧波教会医院」(『浙江档案』3、2009年)。
- 顧衛民『基督教与近代中国社会』(上海人民出版社、1996年)。
- 顧衛星「晚清伝教師關於教会学校英語教学的論争」(『解放軍外国語学院学報』25(1)、2002)。
- 顧長声『宣教師与近代中国』(上海人民出版社、1981年)。
- 郝先中「晚清中国对西洋医学的社会認同」(『學術月刊』5、2005年)。
- 「西医東漸与中国近代医療衛生事業的肇始」(『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』1、2005年)。
- 何小蓮「略論晚清西医的文化穿透力」(『社会科学』3、2003年)。
- 「来華新教伝教士の早期医学活動」(『档案与史学』1、2003年)。
- 「晚清新教“医学伝教”的空間透析」(『中国歴史地理論叢』2、2003年)。
- 『西医東漸与文化調適』(上海古籍出版社、2006年)。
- 「伝教士与中国近代公共衛生」(『大連大学学報』5、2006年)。
- 「藉医伝教与文化適應——兼論医学伝教士之文化地位」(『西北大学学報(哲学社会

- 科学版)』38(5)、2008年)。
- 「略論近代上海西医的社会地位」(『社会科学』8、2009年)。
- 胡成「何以心繫中国——基督教医療伝教士与地方社会(1835-1911)」(『近代史研究』4、2010年)。
- 『医療、衛生与世界之中国(1820-1937)』(科学出版社、2013年)。
- 胡成·韓戊「基督教医療伝教士為甚麼心繫中国」(『看歷史』1、2011年)。
- 黄克武「申報医藥廣告看民初上海的医療文化与社会生活」(『中央研究院近代史研究所集刊』17、1988年)。
- 康志杰·孫素雯「生命的見証：近代基督教医療事工平議——以武漢地区教会医院為背景」(劉天路編『身体·靈魂·自然——中国基督教与医療、社会事業研究』(上海人民出版社、2010年)。
- 雷祥麟「負責任的医生与有信仰的病人——中西医論争与医病關係在民国時期的轉變」(『新史学』14(1)、1995年)。
- 李伝斌「基督教在華早期医療事業論略」(『晋陽學刊』1、2000年)。
- 「基督教在華医療事業与近代中国社会(1835-1937)」(蘇州大学博士論文、2001年)。
- 「李鴻章与近代西医」(『安徽史学』3、2001年)。
- 「中華博医会初期的教会医療事業」(『南都學壇』23(1)、2003年)。
- 「教会医療事業在近代中国產生發展的原因探析」(『泰山学院學報』26(2)、2004年)。
- 「医学伝教士与近代中国西医翻譯名詞的確定和統一」(『中国文化研究』4、2005年)。
- 「近代來華新教医学伝教士的西医訳」(『中華文化論壇』1、2005年)。
- 「教会医院与近代中国的慈善救濟事業」(『中国社会經濟史研究』4、2006年)。
- 「北洋政府对待教会医療事業的態度和政策」(『山東大学學報(哲学社会科学版)』5、2009年)。
- 『条約特權制度下的医療事業——基督教在華医療事業研究(1835-1937)』(湖南人民出版社、2010年)。
- 李国強『孫中山与香港』(香港各界文化促進會、2011年)。
- 李吉奎『孫中山的生平及其事業』(中山大学出版社、2001年)。
- 李建民『生命与医療』(中国大百科全书出版社、2005年)。
- 『從医療看中国史』(聯經出版事業、2008年)。
- 李克訪「銅山農村經濟調查」(李文海主編『民国時期社会調查叢編』鄉村社会卷上、福建

- 教育出版社、2004年)。
- 李尚仁「展示·説服与謠言——19世紀伝道医療在中国」(林富士主編『宗教与医療』聯経、2011年)。
- 李少明「建国前福建基督教的社会活動」(『南平師專学報』3、1999年)。
- 「近代福建基督教的兩大重要地位」(『世界宗教研究』4、2003年)。
- 李曉涛「来自異域的不同声音——早期在華伝教士对中医之評介」(『南京中医薬大学学報(社会科学版)』2、2010年)。
- 李永安「從西医中訳看中医名詞英訳標準化」(『中国科技翻訳』2、2002年)。
- 梁其姿「麻風隔離与近代中国」(『歴史研究』5、2003年)。
- 『面对疾病——伝統中国社会的医療観念与組織』(中国人民大学出版社、2012年)。
- 林治平編『基督教与中国本色化——国際學術研討会論文集』(宇宙光出版社、1990年)。
- 劉遠明「中華医学会与民国時期的医療衛生体制化」(『貴州社会科学』6、2007年)。
- 「中華医学会与博医会的合作及合併」(『自然弁証法研究』2、2012年)。
- 劉沢生「早期医史学者——尹端模」(『中華医史雜誌』3、1998年)。
- 劉笑春「湘雅医学院簡史」(『中国科技史料』6(1)、1985年)。
- 梅曉娟·周曉光「晚清在華伝教士与英漢科技詞典編纂」(『辞書研究』4、2007年)。
- 聶資魯「百余年来美国的基督教在華伝教史研究」(『近代史研究』3、2000年)。
- 馬伯英·高晞·洪中立『中外医学文化交流史——中外医学跨文化伝通』文匯出版社、1993年(정우열訳『中外医学文化交流史』진과과학사、1997年)。
- 潘吉星『中外科学之交流』(中文大学出版社、1993年)。
- 潘榮華「尹端模——近代自弁医報的開創者」(『医学与社会』24(4)、2011年)。
- 皮春花「教会医学与近代福建社会」(福建師範大学修士論文、2007年)。
- 皮国立「民国時期中西医詮釈疾病的界線与脈絡——以「傷寒」為例的討論」(『科技医療与社会』11、2010年)。
- 馮秋季「“療靈”与“療身”——近代加拿大伝教士在衛輝的借医伝教」(『史学月刊』4、2010年)。
- 秦国攀「中華医学会研究(1915-1937)」(河北大学修士論文、2010年)。
- 上海市医学会『上海市医学会90周年記念冊』2007年。
- 史静寰「近代西方伝教士在華教育活動的專業化」(『歴史研究』6、1989年)。
- 史如松·張大慶「從医療到研究——伝教士医生的再轉向——以博医会研究委員會為中心」

- (『自然科学史研究』4、2010年)。
- 孫希磊「基督教与中国近代医学教育」(『首都師範大學學報(社会科学版)』2、2008年)。
- 譚樹林『美国传教士伯駕在華活動研究(1834-1857)』(群言出版社、2010年)。
- 陶飛垂『辺緑の歴史——基督教与近代中国』(上海古籍出版社、2005年)。
- 陶飛垂·楊衛華『研究生·學術入門手冊——基督教与中国社会研究入門』(復旦大學出版社、2009年)。
- 陶飛垂·姚海鈞「在華傳教運動的内部檢討——以『教務雜誌』(*The Chinese Recorder*, 1967-1941)的醫藥傳教士文章為拋」(劉天路編『身体·靈魂·自然——中國基督教与醫療、社会事業研究』上海人民出版社、2010年)。
- 陶飛垂「傳教士中醫觀的變遷」(『歷史研究』5、2010年)。
- 田濤「清末民初在華基督教醫療衛生事業及其專業化」(『近代史研究』5、1995年)。
- 王爾敏『近代上海科技先驅之仁濟醫院与格致書院』(宇宙光、2006年)。
- 王国平「從蘇州博習醫院看教會醫院的社会作用与影響」(『史林』3、2004年)。
- 王立新『美国传教士与晚清中国現代化』(天津人民出版社、1997年)。
- 王樹槐「清末翻譯名詞的統一問題」(『中央研究院近代史研究所集刊』1、1969年)。
- 王治心『中国基督教史綱』(青年協會書局、1940年)。
- 温昌斌「中国近代的科学名詞審查活動——1928-1949」(『自然弁証法通訊』28(2)、2006年)。
- 「科学名詞審查会」(『科技術語研究』3、2006年)。
- 「近代中国關於科技名詞統一實踐工作要点的認識」(『中国科技術語』4、2009年)。
- 『民国科技名詞統一工作實踐与理論』(商務印書館、2011年)。
- 吳義雄「醫務傳道方法与“中国醫務傳道会”的早期活動」(『中山大學學報論叢』3、2000年)。
- 『在宗教与世俗之間——基督教新教傳教士在華南沿海的早期的活動研究』(廣東教育出版社、2000年)。
- 「晚清時期西方人体生理知識在華傳播与本土化」(劉天路編『身体·靈魂·自然——中國基督教与醫療、社会事業研究』(上海人民出版社、2010年)。
- 謝蜀生「中華醫學會早期著名活動家——俞鳳賓博士」(『医学与哲学』6、1995年)。
- 熊月之『西学東漸与晚清社会』(上海人民出版社、1994年)。
- 『晚清新學書目提要』(上海書店出版社、2007年)。

- 熊月之·周武主『聖約翰大学史』(上海人民出版社、2007年)。
- 徐小群『民国时期的国家与社会——自由職業团体在上海的興起1912-1937』(新星出版社、2007年)。
- 余新忠「中国疾病、医療史探索的過去、現實与可能」(『歷史研究』4、2003年)。
- 『清以来的疾病、医療和衛生——以社会文化史為視角的探索』(生活·讀書·新知三聯書店、2009年)。
- 余新忠·楊璐璋「馬根济与近代天津医療事業考論——兼談“馬大夫”与李中堂“興医”的訴求歧異与相处之道」(『社会科学輯刊』3、2012年)。
- 徐以驊「吳虹玉与中国聖公会」(『復旦學報(社会科学版)』2、1997年)。
- 薛愚主『中国藥学史料』(人民衛生出版社、1984年)。
- 楊念群『再造病人——中西医冲突下的空間政治(1832-1985)』(中国人民大学出版社、2006年)。
- 楊明哲「李鴻章与近代西方医学在中国的伝布」(『長庚人文社会學報』2(2)、2009年)。
- 楊天宏『基督教与民国知識分子——1922年-1927年中国非基督教運動研究』(人民出版社、2005年)。
- 尹倩「分化和融合——論民国醫師团体的發展特点」(『甘肅社会科学』2、2008年)。
- 「近代中国西医群体的產生与發展特点」(『華中師範大學學報(人文社会科学版)』4、2007年)。
- 張大慶「早期医学名詞統一工作——博医会的努力和影響」(『中華医史雜誌』24(1)、1994年)。
- 「中国近代解剖学史略」(『中国科技史料』4、1994年)。
- 「中国近代的科学名詞審查活動——1915-1927」(『自然弁証法通訊』18(5)、1996年)。
- 「高似蘭——医学名詞翻譯標準化的推動者」(『中国科技史料』4、2001年)。
- 張劍「近代科学名詞術語審定統一中的合作、衝突与科学發展」(『史林』2、2007年)。
- 張寧「腦為一身之主——從「艾羅補腦汁」看近代中国身体觀的變化」(『中央研究院近代史研究所集刊』74、2011年)。
- 周明忻「王吉民医史論文目錄」(『中華医史雜誌』2、2000年)。
- 朱維錚『基督教与近代文化』(上海人民出版社、1994年)。
- 朱英·魏文享『近代中国自由職業者群体与社会變遷』(北京大学出版社、2009年)。

ハンゲル(가나다라順)

- 김상근 『선교학의 구성요건과 인접학문』 (연세대학교출판부, 2006年)。
- 김윤성 「개항기 개신교 의료활동의 사회사상사적, 종교사적 의미」 (『한국종교연구회 회보』 4, 1993年)。
- 盧在軾 「쟁점과 동향 : 중국 근대 기독교사 연구 동향——중국대륙, 대만, 홍콩, 미국 학계를 중심으로」 (『중국근현대사연구』 28, 2005年)。
- 「19세기 말 서양인들의 근대 중국 아편흡연에 대한 인식과 아편금연 활동에 관한 연구」 (『中国学論叢』 30(1), 2010年)。
- 宮川卓也 「‘전통’ 과 ‘근대’ 의 변모——이종찬 『동아시아 의학의 전통과 근대』 (문학과 지성사, 2004)」 (『한국과학사연구』 30(1), 2008年)。
- 박윤재 『한국 근대의학의 기원』 (혜안, 2005)。
- 辛圭煥 「衛生의 概念史——清末民国期 中西醫의 衛生論」 (『동방학지』 138, 2007年)。
- 「한국 근대의학의 탄생과 국가 : 国家衛生医療体制와 国家医療의 形成——19세기 말 20세기초 한국과 중국의 경험」 (『동방학지』 139, 2007年)。
- 『국가, 도시, 위생——1930년대 베이핑시정부의 위생행정과 국가의료』 (아카넷, 2008年)。
- 「동아시아 의학사 연구의 동향과 전망」 (『의사학』 19(1), 2010年)。
- 「民国時期 醫師免許制度의 設立過程과 醫師의 社会的 地位」 (『동양사학연구』 11, 2011年)。
- 양홍석 「19세기말과 20세기 초 미국 선교사들의 중국에 대한 이해」 (『미국사연구』 20, 2004年)。
- 여인석 「한국과 중국의 선교의학」 (『연세의사학』 1(2), 1997年)。
- 「한국근대 선교의료기관의 형성과 성격」 (『東方學志』 139, 2007年)。
- 「한말과 일제 시기 선교의사들의 전통의학 인식과 연구」 (『医史學』 15(1), 2006年)。
- 「한말과 식민지 시기 서양의학의 한의학 인식과 수용」 (『医史學』 16(2), 2007年)。
- 연세대학교 의학사연구소編 『한의학, 식민지를 읽다』 (아카넷, 2008年)。
- 李万烈 『한국기독교의료사』 (아카넷, 2003年)。

- 이선호·박형우「올리버 알 에비슨(Oliver R. Avison)의 의료선교사 지원과 내한 과정」(『역사와 경계』 84, 2012年)。
- 이종찬『동아시아 의학의 전통과 근대』(문학과 지성사, 2004年)。
- 李春蘭「韓國에 있어서의 美國宣敎醫療活動、1884-1934」(『梨大史苑』 10, 1972年)。
- 曹貞恩「中國醫療伝道協會의 역할——초기 활동을 중심으로(1886~1907)」(『명청사연구』 37, 2012年)。
- 존 K. 페어뱅크 編, 김한식·김종건 訳『캠브리지 중국사』 10(下)(『새물결』, 2007年)。
- 허원「청말의 선교사·제국주의와 중국인의 대응」(『역사비평』 15, 1991年)。

英文(姓のアルファベット順)

- Barnes, Linda L. *Needles, Herbs, Gods, and Ghosts: China, Healing, and the West to 1848*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2007.
- Bays, Daniel H.(ed.). *Christianity in China: From the Eighteenth Century to the Present*, Stanford: Stanford University Press, 1996.
- Benedict, Carol. *Bubonic Plague in Nineteenth-century China*, Stanford: Stanford University Press, 1996.
- Bliss, Edward Jr. *Beyond the Stone Arches: An American Missionary Doctor in China*, New York: John Wiley & Sons, 2000.
- Bowers, John Z. *Western Medicine in a Chinese Palace: Peking Union Medical College, 1917-1951*, Philadelphia: The Josiah Macy, Jr. Foundation, 1972.
- Buck, Peter. *American Science and Modern China, 1876-1936*, New York: Cambridge University Press, 1980.
- Carlson, Ellsworth C. *The Foochow Missionaries, 1847-1880*, Cambridge, MA: East Asian Research Center, Harvard University, 1974.
- Chen, C. C. *Medicine in Rural China*, Berkeley: University of California Press, 1989.
- Cheung, Yuet-wah. *Missionary Medicine in China: A Study of Two Canadian Protestant Missions in China before 1937*, Lanham, MD: University Press of America, 1988.
- Choa, Gerald H [蔡永業]. “Heal the Sick” was their Motto: *The Protestant Medical Missionaries in China*, Hong Kong: Chinese University Press, 1990.

- Cochran, Sherman. *Chinese Medicine Men: Consumer Culture in China and Southeast Asia*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006.
- Croizier, Ralph C. *Traditional Medicine in Modern China: Science, Nationalism, and the Tensions of Cultural Change*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1968(難波恒雄・難波洋子・大塚恭男共訳『近代中国の伝統医学——なぜ中国で伝統医学が生き残ったのか』創元社、1994年)。
- Elman, Benjamin A. *On their Own Terms: Science in China, 1550-1900*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2005.
- Fairbank, John K. and Barnett, Suzanne Wilson(ed.). *Christianity in China: Early Protestant Missionary Writings*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1985.
- Fairbank, John K. *The Missionary Enterprise in China and America*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1974.
- Forsythe, Sidney A. *An American Missionary Community in China, 1895-1905*, Cambridge, MA: Harvard University, 1971.
- Grundmann, Christoffer. “Proclaiming the gospel by Healing the Sick? Historical and Theological Annotations on Medical Mission”, *International Bulletin of Missionary Research*, 14(3), 1990.
- Hardiman, David(ed.). *Healing Bodies, Saving Souls: Medical Missions in Asia and Africa*, Amsterdam: Rodopi, 2006.
- Heinrich, Larissa N. *Afterlife of Images: Translating the Pathological Body between China and the West (Body, Commodity, Text)*, Durham, NC: Duke University Print, 2008.
- Hillier, S. M. and Jewell, J. A. *Health Care and Traditional Medicine in China, 1800-1982*, London: Routledge & Kegan Paul, 1983.
- Latourette, Kenneth Scott. *A History of Christian Missions in China*, New York: Macmillan, 1929.
- Lei, Hsiang-lin. “When Chinese Medicine Encountered the State: 1910-1949”, Ph. D. dissertation, The University of Chicago, 1999.
- Lian, Xi. *The Conversion of Missionaries: Liberalism in American Protestant Missions in China, 1907-1932*, Pennsylvania: Pennsylvania State University Print, 1997.
- Lutz, Jessie Gregory. *China and the Christian Colleges, 1850-1950*, Ithaca: Cornell University Press, 1971.
- Minden, Karen. *Bamboo Stone: The Evolution of a Chinese Medical Elite*, Toronto: University of

- Toronto Press, 1994.
- Park, Eunjin. “From ‘Saving Souls’ to ‘Reforming Society’: Changing Educational Goals of the American Methodist Mission to China, 1847-1911”, 『미국사연구』 20, 2004.
- Reeves, William Jr. “Sino-American Cooperation in Medicine: The Origins of Hsiang-Ya(1902-1914), Liu, Kwang-Ching(ed.). *American Missionaries in China: Papers from Harvard Seminars*, Cambridge, MA: East Asian Research Center, Harvard University, 1966.
- Renshaw, Michelle. *Accommodating the Chinese: The American Hospital in China 1880-1920*, New York: Routledge, 2005.
- Shemo, Connie A. *The Chinese Medical Ministries of Kang Cheng and Shi Meiyu, 1872-1937: On a Cross-Cultural Frontier of Gender, Race, and Nation*, Bethlehem: Lehigh University Press, 2011.
- Shen, Xiao Hong. “Yale’s China and China’s Yale: Americanizing Higher Education in China”, 1900-1927, Ph.D. dissertation, Yale University, 1993.
- Spence, Jonathan. *To Change China: Western Advisers in China, 1620-1960*, Boston: Little, Brown, 1969(三石善吉訳『中国を変えた西洋人顧問』講談社、1975年)。
- Tao, Feiya. “The Evolution of European Missionaries’ Views”, *Chinese Studies in History*, 46(2), 2012–13.
- Unschuld, Paul U. *Medicine in China: A History of Ideas*, Berkeley: University of California Press, 1985.
- Wang, Hsiu-yun. “Stranger Bodies: Women, Gender, and Missionary Medicine in China, 1870s-1930s”, Ph. D. dissertation, The University of Wisconsin-Madison, 2003.
- Williams, C. Peter. “Healing and Evangelism: The Place of Medicine in Later Victorian Protestant Missionary Thinking”, *The Church and Healing: Papers Read at the Twentieth Summer Meeting and the Twenty-first Winter Meeting of the Ecclesiastical History Society*, Oxford: Published for the Ecclesiastical History Society by B. Blackwell, 1982.
- Xu, Xiaoqun. *Chinese Professionals and the Republican State: The Rise of Professional Associations in Shanghai, 1912-1937*, Cambridge: Cambridge University Press, 2001.
- Xu, Yihua. “St. John’s University, Shanghai as an Evangelising Agency”, *Studies in World Christianity*, 12(1), 2006.
- Young, Theron Kue-Hing. “A Conflict of Professions: The Medical Missionary in China,

1835-1890", *Bulletin of the History of Medicine*, 47(3), 1973.

Zaccarini, Cristina Maria. *The Sino-American Friendship as Tradition and Challenge: Dr. Ailie Gale in China 1908-1950*, Bethlehem: Lehigh University Print, 2001.

論文の内容の要旨

論文題目 近代中国におけるプロテスタント医療宣教の展開
——中国医療伝道協会を中心に(1886-1932)
氏名 曹 貞恩

本論文は近代中国の社会や医療に大きな影響を与えたプロテスタント医療宣教師の団体である中国医療伝道協会(The China Medical Missionary Association)を取り上げ、その活動を明らかにするとともに、医療伝道事業の土着化について論じたものである。本論文でいう医療伝道事業の土着化とは、ミッション系病院及び医学校における運営・管理権が、外国人医療宣教師から中国人に移っていくことを意味している。医療伝道事業の土着化に関する研究は、中国におけるキリスト教の土着化問題を考察するために不可欠であるのみならず、近代中国の社会や医療界を理解するためにも必要な作業である。

まず第一章では、医師と宣教師という二つの顔を持った医療宣教師のアイデンティティ問題について考察し、医療宣教師の活動の重点が、時代とともに福音伝道から医療活動及び医学教育に移っていったこと、そのような変化がとくに 1920 年代から加速したことを明らかにした。医療と伝道の分離が 1920 年代に入ってから急速に進んでいった理由としては、①教会や学校のような伝道機関が普及してきたことによって、病院の伝道機関としての役割が小さくなったこと、②キリスト教とは関係のない病院が増えており、もしミッション系病院が専門化しなければ、淘汰されるという危機感が生じたことが挙げられる。

医療宣教師が医療活動に精力と関心を集中していく過程は、病院や医学校における伝道活動の大きな部分が中国人の影響下に置かれるようになったこととも密接に関連する。この現象は、中国における医療伝道事業の土着化の一つの表れとして理解できる。またこのような医療宣教師の性格の変化は、中国医療伝道協会にも大きな影響を与えたのである。

第二章では、1907年から1932年までの中国医療伝道協会の変化及び中華医学会との合併に至る過程を考察した。1907年に中国医療伝道協会は、雑誌名から Missionary という一語を削除するとともに、協会名として「博医会」、機関誌名として『博医会報』という中国語名称をつけた。そのため本論文では、1886年から1906年までは中国医療伝道協会、1907年からは博医会と表記する。また1925年には、英文の協会名や会則を変更し、宗教色の強い医療宣教師の団体から、医療活動中心の医学団体に生まれ変わろうとした。このような変化は、第一章で述べた医療宣教師が医療に専念するようになっていく傾向とも関連する。また、反キリスト教運動や民族主義の影響によって、中国人西医(西洋医学を修めた中国人の医師)がミッション系団体への加入を忌避していたため、協会名や会則を変更することで、より多くの中国人医師を会員として受け入れようとしたのである。

1932年、博医会は中華医学会に合併された。合併の原因としては、教会を中国人主導にしようとする運動の拡大や国民政府の教会病院や医学校に対する統制とともに、ミッション系病院や医学校において中国人の影響力が強くなったことが挙げられる。中華医学会の立場からみると、国民政府との協力を図る中で、影響力を強めつつあった中華医学会を中心に、医学界を統合しようという目的があった。このような博医会と中華医学会の合併は、医療伝道事業の土着化過程が最もよく表れた出来事ともいえよう。

第三章では、医療宣教師が実際に活動していた場であるミッション系病院や医学校における土着化について、病院の経済的自立や医学校における教授言語をめぐる議論を中心に分析した。まず、ミッション系病院や医学校における運営費をなるべく外国からの資金に依存せず、中国現地での支援や治療費によって確保するという経済的な自立は、医療伝道事業の土着化にも直接かわる問題であった。しかし実際のところ、1930年代にも外国から何らかの支援を受けている病院が多く、経済的な自立は達成されていなかった。もちろん病院の収入からみると、外国からの資金がほとんどであった当初とは異なって、現地からの支援や治療費が占める割合が大きくなっていったことは事実である。

また、土着化を進めるためには、経済的な自立と同様に中国人医師の養成も重要であり、そのため医療宣教師は医学生教育に力を注いでいた。医学校の運営において最も議論になったのは、

医学を英語で教えるか中国語で教えるかの問題であった。医学教育を土着化させるためには、中国語による教育が必要であることは明白だが、一方で英語による医学教育のほうが高い水準の医師を養成できるという意見も根強かった。1930年代になると、ミッション系医学校の多くは中国語と英語を併用するという方法を選んだが、それはある意味で現実と妥協したとも、ミッション系医学校としての特徴を生かしていたともいえよう。

第四章では、中国医療伝道協会が1890年に設立した医学用語委員会の活動を中心に、医療宣教師が医学用語の翻訳や統一に尽力し、統一された用語に基づいて医学書を編纂するなど、中国での西洋医学教育の体系化に努めていたことを明らかにした。その過程において、注目すべき点は、彼らが中国人との協力を最も重視していたことである。それは、医療宣教師自身が、中国人との協力なしに医学用語を普及させることは無理であると認識していたからであるといえる。1915年の中華医学会や中華民国医薬学会の設立、さらに医学用語審査会の組織をきっかけとして、医療宣教師の役割は欧米や日本への留学経験を持つ中国人に代替された。一方、博医会は審査会の中で唯一の外国人中心の団体として、外国語を中国語に訳す際に重要な役割を果たしていたと考えられる。

医療宣教師の用語は、完璧なものではなく、その中には中国人から批判されたものも少なくないが、西洋医学用語を訳せる中国人の人材が存在しなかった状況下で、彼らが医学用語を造り出すために努力していたことは、正当に評価すべきであろう。

第五章では、医療宣教師の中国医学、特に中薬に対する研究や認識について考察することで、西洋医学の土着化過程における西洋医学と中国医学の相互作用の一面を示そうと試みた。初期の医療宣教師の中薬に対する研究は、薬の不足という現実的な問題を解決するための手段として、必要に応じて行われた。中国医療伝道協会が中薬委員会を設立して、実際に使える中薬を調査することに力を入れていたのも、そのためである。しかし、1920年代前後からは、学術的な目的から中薬に対する体系的な研究が始まった。学問的な研究が進むなかで、中薬に関する認識も変化していった。たとえば、薬理学の発展によって貴重なホルモンが発見されたことによって、以前は嫌悪感を引き起こすとして批判された中国の動物性薬物に対する認識も、そのなかから治療効果のあるものを発見できるかもしれないという肯定的な見方へと変化した。

そして、先行研究では、医療宣教師の中国医学に対する認識が時代によって変化したと指摘されているが、実際の医療活動に役に立つものは高く評価し、西洋医学の見方からは理解できない理論については否定するような態度は、基本的にはあまり変わらなかった。もちろん時代が経つにつれ、中国医学を理解する必要性は高まった。医療宣教師は医療活動に集中していくなかで、

中国人患者と交流するためには、中国人が最も信頼していた中国医学の理論や用語を自ら理解する必要があることに気が付いたのである。また、中国医学のなかに効果の大きい治療法もあることは、医療宣教師も否定できなかった。しかし彼らは、基本的には西洋医学の優越性を固く信じ、中国に必要なのは科学的な西洋医学に違いないと考えていた。

本論文は、中国医療伝道協会が成立した 1886 年から中華医学会に合併される 1932 年までの期間を主な考察対象とし、中国医療伝道協会が中国の社会や医療に大きな影響を与えていたことや、中国における医療伝道事業の責任が、西洋人医療宣教師から中国人クリスチャン医師や牧師に移っていったことを明らかにした。しかし、博医会と中華医学会の合併によって、中国における医療宣教師の役割が完全に終わったわけではない。この時点で教会医療伝道事業の土着化は、まだ進行の過程にあった。それは医療宣教師が目指していた土着化が、あくまでもキリスト教の慈善事業としての性格が守られた形での土着化であったことと関連する。つまり、中国教会や中国人クリスチャン医師がミッション系病院を直接管理、運営できるまでは、外国人医療宣教師が必要である、と彼らは考えていた。キリスト教とは関係ない中国人西医の増加、反キリスト教運動やナショナリズムの影響のなかで、医療伝道事業の土着化は医療宣教師の予想より速く進んだが、医療伝道事業への医療宣教師の働きかけは、その後も続いた。一例として、博医会と中華医学会の合併後、新しい中華医学会のなかには、キリスト教会の医療伝道事業を担当するための教会医事委員会が設置されたが、1950 年まで、この委員会のなかで主導的な役割を果たしていたのは、中国人ではなく、外国人医療宣教師であった。

本論文で述べた教会医療伝道事業の土着化過程からみると、中国人クリスチャンが医療伝道の必要性を十分に認識していたこと、医療宣教師の活動が中国人クリスチャン医師によって継承されたことは明白である。つまり、医療伝道の効果という問題においては、単に改宗者の数から判断するのではなく、中国人クリスチャンや中国教会の観点から見直す作業が必要ではないかと考えられる。